

福岡大学大学院講演会

(人文科学研究科英語学英米文学専攻主催)

参加ご希望の方は、Webexのミーティング情報をお送りしますので、こちらのQRコードを読み取って1月7日までにお申し込みください。



コロナ禍の中で “The Rime of the Ancient Mariner” を読むということ

日時:1月9日(土)13:30-15:00

Webex Meetings利用

講師:東京大学大学院教授
アルヴィ宮本なほ子先生

イギリス・ロマン派研究の泰斗であったマクファーランド (Thomas McFarland 1926-2011) は、『ハムレット』の“To be or not to be”を除いて、コウルリッジ (Samuel Taylor Coleridge) 「老水夫行」 (“The Ancient Mariner”) の“Water, water everywhere”の一節は、おそらく、英語で最もよく知られたフレーズであり、「老水夫行」自体、世界的に知られた詩であろうと述べている。コウルリッジは、この作品を1798年の *Lyrical Ballads* で発表した後、1817年に詩のテキストの余白に散文の註 (marginal gloss) を加えるという大きな修正を行い、生涯にわたって修正を続けた。

本発表では、19世紀、20世紀、21世紀に“The Ancient Mariner”がどのように新しい側面を見せ続けていったかを *The Rime of the Ancient Mariner: Big Read* (<https://www.ancientmarinerbigread.com/readings>) を中心に考察する。Big Read は、コウルリッジの作品と現代の知性とのコラボレーションとも言えるもので、「老水夫行」の現代的意義を探った詩人、小説家、俳優、アーティスト、科学者たちが協働して創作したサイトであり、Covid-19により全世界が閉塞、孤独と向き合うことになった2020年4月に再び配信され、大きな注目を集めた。

お問い合わせ先: 園田暁子

asonoda*fukuoka-u.ac.jp(*を@に置き換えてください)